

K-853

川西町文化財調査報告書第3集

# 道伝遺跡 I

—第1次調査概報—

1981

川西町教育委員会

## 序

道伝遺跡は、昭和の初年に安斎徹氏を中心として、等間隔に並ぶ柱根を確認されてより、「犬川の柵」として呼ばれ、本遺跡を柵跡として推定されてきました。しかし、柱根を確認されてから後、約半世紀の間、調査もされないままであります。しかし、昭和54年度の臨場整備事業により、当地域を緊急発掘調査として調査を行った結果、出土品と共に木簡等の重要な遺物が数多く発見され、文化庁及び県文化課の助言を受けて、本県、本町の重要な遺跡と判断し、史跡指定のための国庫補助の交付を受けて、本年度より3年の継続事業としての第1次発掘調査を実施致し、所期の目的を達成することができました。

本年度は、遺跡を区画すると考えられる大形溝と用水路工事で断面が確認された溝を中心として調査を致しました。調査の成果にもとづき、概略を報告致しますので、広く町民の方々に本遺跡の認識を新たに深めていただき、研究者の方には御研究の資料として御活用いただければ幸に存じます。

調査では、一つの事実が少しづつ判明するたびに、それ以上の課題が増えてくるが、今後の調査により、先人の遺産文化を幾分づつでも解明させていきたい。

最後に、発掘調査を執行するにあたっては、県文化課をはじめ、特別調査委員、協力委員の方々より、御教示をいただき、記して感謝の意を表わすとともに、地元の土地所有者及び町民各位、発掘作業員の方々に御協力をいただき、ここに記して深甚なる謝意を表したい。

昭和56年3月25日

川西町教育長 笹木勝政

## 目 次

序

目 次

調査要項

## 本 文

I 遺跡の概要 a 前年までの調査 b 今年の調査計画 c 層序	.....	1
II 調査経過	.....	4
III 検出された遺構遺物 a 掘立柱建物跡 b 土壙 c 溝跡	.....	9
IV 考 察	.....	13

## 挿 図

第1図 道伝遺跡周周辺の地形図	.....	1
第2図 道伝遺跡グリット配図	.....	2
第3図 土層図	.....	3
第4図 遺構配図	.....	5～6
第5図 S B 9～11 堀立柱建物跡	.....	7～8
第6図 溝跡セクション図	.....	11～12

## 図 版

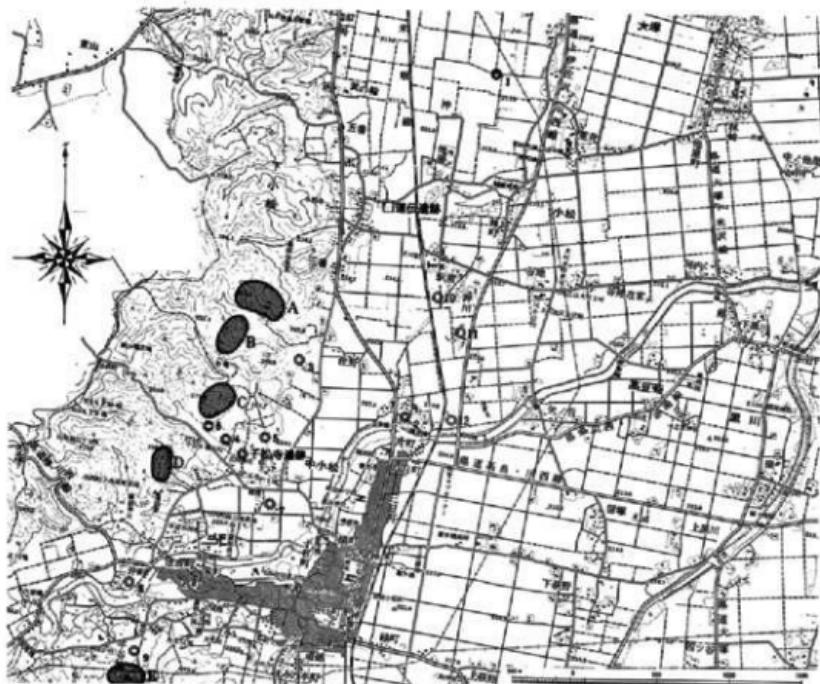
第1図版	○ 調査地遠景	○ 発掘前風景	○ 発掘風景
第2図版	○ S B 9 建物跡	○ S B 10 建物跡	○ S B 9 掘り方
第3図版	○ S D 5・6・7 溝跡	○ S D 5 遺物出土状況(4)	
	○ A S D 5, B S D 6 層位		
第4図版	○ S D 5 出土遺物		
第5図版	○ S F 1 (R P 3), S D 6 (R P 134), S D 5 (R W 250, R P 181)		
	出土遺物		

## 調査要項

- 1 遺跡名 道伝遺跡
- 2 所在地 山形県東置賜郡川西町大字下小松字道伝前
- 3 調査期間 昭和55年6月2日～同年10月3日
- 4 調査主体 川西町教育委員会
- 5 調査協力 山形県教育庁文化課
- 6 特別調査員 柏倉亮吉・工藤定雄・加藤 稔・佐藤鎮雄・手塚 孝・平川 南  
橋爪 健
- 7 調査協力委員 五十嵐不二雄・井上昌平・石田四郎右衛門・石田東一・小原久助  
藏田順治・竹田源右衛門・小関寿郎
- 8 調査主任 藤田宥宣
- 9 調査員 月山益弘
- 10 事務局 川西町教育委員会社会教育課 工藤盛光・四柳清蔵・松村利子

## 例　　言

1. 本報告書は、川西町教育委員会が昭和55年度に実施した発掘調査概報である。
2. 描図縮尺はスケールを示し、記号はSB(掘立柱建物跡), EB(掘り方), SD(溝跡), SK(土壤), RP(土器及び土製品), RW(木器及び木製品)と明示した。
3. 発掘調査概報の作成は藤田宥宣・月山益弘が担当し、藤田が執筆した。  
実測図、トレースは月山が担当し、写真は両名で行った。



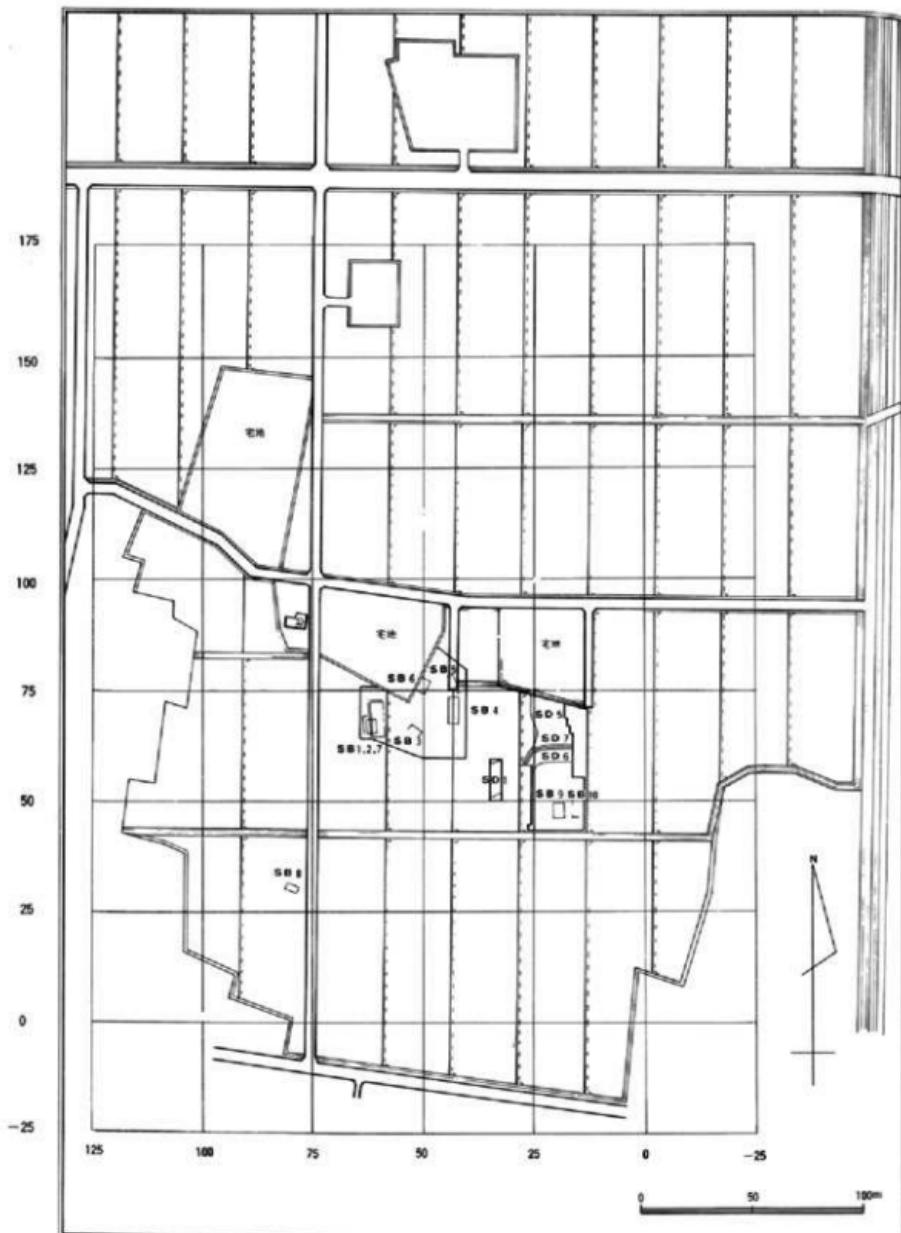
- 1.熊藏北遺跡 2.中小松六角遺跡 3.佐野遺跡 4.尼ヶ沢遺跡 5.千松寺塚墓群 6.尼ヶ沢土壙  
 7.千松寺遺跡 8.諏訪遺跡 9.平谷地遺跡 10.招城遺跡 11.開遺跡 12.片町東遺跡  
 A築跡沢墳墓群 B舞台山墳墓群 C尼ヶ沢墳墓群 D正安寺墳墓群 E平谷地墳墓群

第1図 道伝遺跡周辺の地形図

## I 遺跡の概要

### a) 前年までの調査

道伝遺跡の調査は、昭和10年に安斎徹氏が調査。昭和54年、当地域が圃場整備事業を実施するにあたり、緊急発掘調査（昭和54年6月1日～同年8月25日）を行った。調査により一般集落では考えられない木簡5点、墨書き額93点、掘立柱建物跡8棟等が検出された。註1そこで、県文化課・町教育委員会・県置賤北部土地改良事務所の話し合いにより、すでに圃場整備事業により全水田の耕作土が剥離された田面に覆土をなし、遺跡の範囲、性格を探究するため、今年度より3ヶ年の学術調査を実施したものである。



第2図 道伝遺跡グリット配図

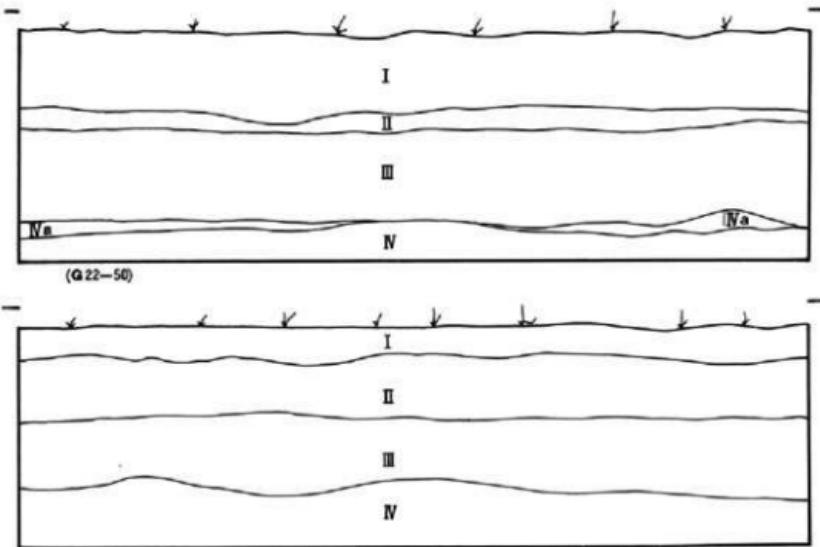
### b) 今年の調査計画

緊急発掘調査で検出された S B 1 (3 × 7間) が都心域の西側殿とするならば、前年度調査地東地区に東側殿があるのではという想定をもとに、調査地を設定し、S D 1 (大型構造遺構) の確認と圃場整備により仮用水路を掘った所で、検出された S D 2 の把握に主眼をおくことにした。

今年度の調査地域は、盛り土作業を行った  $7,519 \text{ m}^3$  の一部  $1,807 \text{ m}^3$  G 16 ~ 29 - 43 ~ 75 で、調査方法は緊急発掘で用いた東西 300 m、南北 400 m の基準線を用い、 $2 \text{ m} \times 2 \text{ m}$  を 1 グリットとしている。(西北を基準線)

### c) 層序

調査地の表土は昨年の圃場整備により搅乱されている。第Ⅰ層搅乱層の厚さは一定せず G 26 - 50, G 20 - 45 付近は 10 ~ 20 cm と薄く、G 17 - 46 付近は 25 ~ 30 cm と厚い。第Ⅱ層は暗褐色粘質土で遺物包含層となっている。第Ⅰ層搅乱層の厚い所は第Ⅱ層が薄く、第Ⅰ層が薄い所は第Ⅱ層が厚くなっている。第Ⅲ層は明褐色粘質土であり、遺構確認は第Ⅲ層上面である。第Ⅳ層はグリットにより違い、A 地区 (G 15 ~ 29 - 62 ~ 75) 青灰褐色微砂質土層で、B 地区 (G 15 ~ 29 - 42 ~ 57) は、褐色粘質土であり、ところにより褐色の砂層 (IVa) が入る部分もある。第Ⅳ層は無遺物層となる。

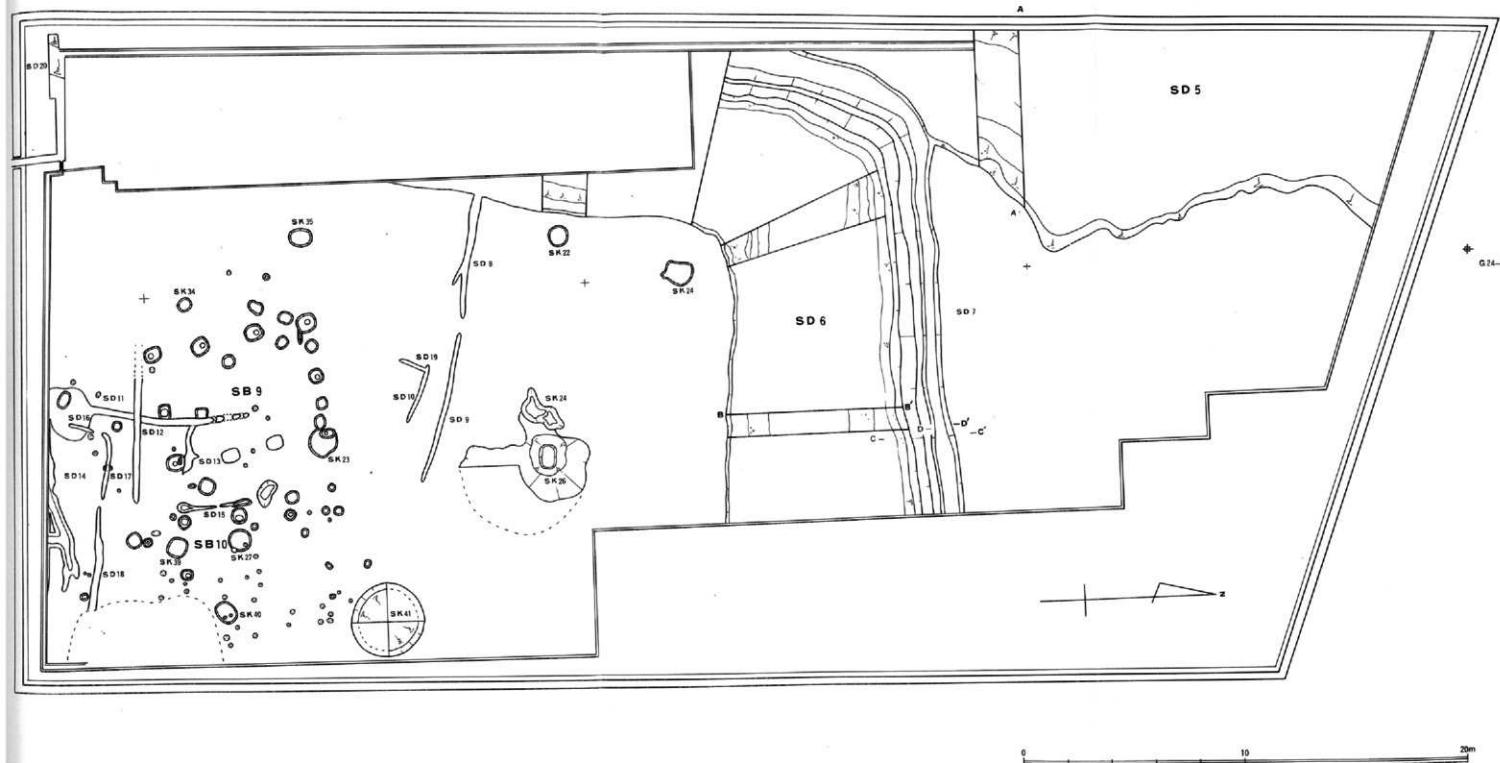


第3図 土層図

## II 調査経過

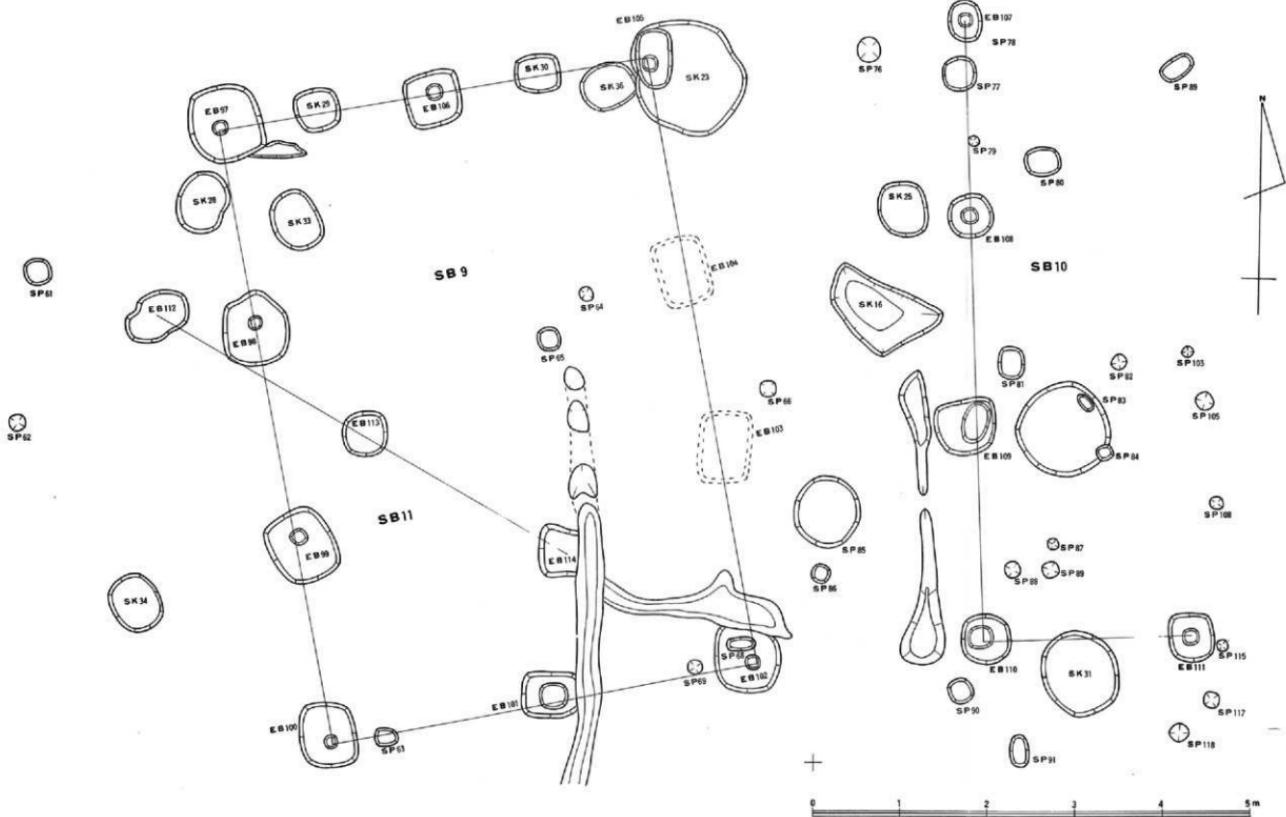
調査は6月2日より9月22日まで行ない、調査地面積1,807m<sup>2</sup>で精査面積は1,140m<sup>2</sup>である。以下、調査日誌をもとに経過をたどることにする。

- 5月2日 緊急発掘で湧水及び用水路の水が流れ込み、調査が難行した経験より、  
6月2日～6月22日 調査地西側に深さ30cmの排水路をこれと平行して、昨年度調査地より  
基準点をおとす。  
6月2日～6月4日 調査地全体の遺構を知る上で、巾3mのトレンチを井げたに組み、さ  
らに調査地中央部に巾2m長さ10mのトレンチを組み表土を排除し、  
大まかな遺構プランを認知する。  
6月5日～6月23日 重機にて第I層(攢乱層)排除、面整理を行ない、大溝プランを確認  
し、調査区北側(G 15～29 - 62～75)をA地区・南側(G 15～  
29 - 42～57)をB地区と便宜的に区分する。A地区精査。  
6月24日～6月26日  
(7月2日) S D 6・7 12cm掘り下げ。  
6月27日～7月9日 B地区面整理及び精査、S B 9検出、G 27～59にて墨書「仁」を検出。  
7月10日～7月21日 S D 8～10, S K 22～41掘り下げ。  
7月22日 特別調査委員会を開き、調査地を視察後、打ち合せでA地区S D 5～  
7の一部を掘り下げ層序をとること。B地区の一部を掘り下げ、下層  
に遺構の有無を確認することが提言された。  
7月23日～7月31日 B地区の平面図作成、G 16～21 - 45～L 49を10cm掘り下げ、新  
たな遺構は検出されない。  
8月1日～8月12日 B地区、S K掘り下げを行ない、土層断面図作成。  
8月18日～9月4日 S D 5 (G 30～26 - 64～65)。S D 6 (G 27～26 - 59～62)  
(21～59～62)の掘り下げを行なう。現地説明会資料作成。  
9月5日～9月16日 S D 5掘り下げ終了、多量の遺物検出する。  
9月17日～9月22日 平面図(1/20)作成 写真撮影。  
9月23日～9月24日 管野長治氏畠地に(G 25～75)に基準点(標高213.585m)を作  
る。  
10月3日 器材運搬を行ない、埋めもどし作業に入る。



#### 第4図 遺構配図

5 ~ 6



第5図 SB9～SB11掘立柱建物跡

### III 検出された遺構遺物

#### a 堀立柱建物 第5図 2図版

S B 9 G 20～25～45～50 第III層上面で確認され、東西2間（東梁南より $2.35 + 2.5\text{ m}$ ）×3間（西桁南から $2.35 + 2.5 + 2.4\text{ m}$ ）の隅丸方形の掘り方（約 $90 \times 70\text{ cm}$ 、深さ約 $25\text{ cm}$ ）をもつ堀立柱建物跡である。西側の柱筋は北で西に12度振れる。アタリは確認できるものと、確認できないものがある。大きさも直経 $15\sim 20\text{ cm}$ で、埋土は灰素粒が多く検出された。東側E B 103・104はプラン確認はない。

#### ○ S B 9～11 床面出土遺物

土師器及び須恵器が破片で検出された。土師器、須恵器とも甕片が多く検出され、环は少ない。环底部は糸切り痕が主体をなす。

S B 10 G 18～20～45～50、第III層上面で確認され、東西1間以上（東梁 $2.4\text{ m} + \dots$ ）×3間（南桁より $2.5 + 2.3 + 2.25\text{ m}$ ）で東側は攪乱され検出されない。掘り方は、ほぼ円形で直経約 $50\text{ cm}$ 深さ $35\sim 40\text{ cm}$ を測る。アタリは直径 $20\sim 30\text{ cm}$ を測り、丸柱と考えられる。

S B 11 G 22～24～47～48 第III層上面で確認された。掘方は非常に浅く $5\sim 10\text{ cm}$ の深さで埋土は炭素粒を多く含む黒色粘土層でアタリは検出されない。S D 11 に切られている。2.6m等間で確認され、掘り方中央部を結ぶ線は東で南に30度振れる。

#### b 土 壤 第4図

土壤は20基確認された。主な土壤を選択し説明を加えることにする。なお、確認されたプランはすべて第III層上面である。

S K 22 G 55～25～26 直径 $80\text{ cm}$ の円形をなし、埋土は2層に分かれ、第2層は木炭層となっている。骨片等は検出されず、磨滅した須恵器环の細片1点のみ出土している。

S K 23 G 21～49～50 直径 $1.35\text{ m}$ の円形をなし、深さ $10\text{ cm}$ で埋土は一層である。S B 9の掘り方に切られている。

S K 24 G 25～57～58 不定な形をし、埋土より土師器3点、須恵器1点、环1点出土し自然堆積をなしている。長径 $1.5\text{ m}$ 、短径 $1\text{ m}$ 、深さ $13\text{ cm}$ を測る。

S K 26 G 20～21～55～56 長径 $1.7\text{ m}$ の梢円形をなし、5層の自然堆積層からなる。底部面より細破片が総数578点出土し、磨滅が著しい。

S K 41 G 17～18～50～51 円形を示し、直径 $3.3\text{ m}$ 、深さ $45\text{ cm}$ 、埋土3層で第1層にかぎり $10\sim 20\text{ cm}$ の石が20個出土したが遺物は検出されない。

### c 溝 跡 第6図 2図版

調査地より 16 条の溝跡が検出された。主な溝を説明することにする。

S D 5 G 26～29-54～61 調査地北西部第III層上面でコーナー部を確認したが、溝の西側上端は調査地外のため、溝巾は確認されていない。覆土は自然堆積の 6 層からなっており、最下層は砂疊層で総遺物は 369 点検出している。掘り下げた所は G 27～29-65 で約 2 m × 5 m を掘り下げ、深さは 1.1 m である。

### S D 5 検出された遺物 第4・5図版

- 土器類 1～6 層で 104 点検出され、層位により壺の形等の違いが見られる。ロクロ調整後ヘラ切り及び糸切りが見られ、糸切りが主体をなす。墨書き土器は 4～6 層で検出し、文字として〔目〕〔林〕〔二万〕〔花花〕不明 7 点がある。
- 木質遺物（木製品）3～6 層にかけて検出された。皿、椀類 6 点、きぬた状木製品、柄状木製品、柱根、棒状木器、曲げ物、板材等 57 点である。
- 自然遺物 2～6 層にかけて検出され、クルミ、モモ、ウメ、トチと考えられる種子等 58 点、自然遺物と考えられる木質遺物 155 点が検出された。

S D 6 G 19～28-59～62 調査地中央部を東西に走るもので調査地西側でコーナー部が確認され、南側に曲るものである。溝巾約 7 m、深さ 70 cm を測る。覆土は 4 枚の基本層がみられる。

### S D 6 検出された遺物 5 図版

- 土器類 出土した遺物は土器類のみの検出で、1・2 層からは須恵器・土師器の磨滅が著しい細破片、50 点出土している。3 層からは遺物が検出されず、4 層では上面より、片口土器（株洲焼 14 世紀）の破片が 1 点検出された。

S D 7 G 19～28-63 S D 6 の北側 3 m を S D 6 に沿うように走ると考えられるが、G 18～62 コーナー部は S D 5 と交わる所で、黒色泥質土となるため、コーナー部のプラン検出は困難を要した。覆土は 4～5 層に分かれ、第 1 層上面より 5～10 cm の石が数十個出土し、遺物は磨滅した須恵器壺片が 2 点検出された。

S D 14 G 19～20-43 調査地南端で検出し、第 3 層でプランを確認したものである。長さ約 6 m で調査地外につづく。溝巾 35～50 cm、深さ 15～20 cm で覆土は多量の炭素を含む黒色粘質土層となっている。

### S D 14 検出された遺物

- 土器類 検出された遺物は全て土器類で、総数 215 点をかぞえる。須恵器は 135 点検出され、壺は、ロクロ切り離し糸切り痕を示す。ヘラ切りは見られない。3 層上面にて完形品で葉巻（R P 1）が検出している。

する。

一部を確認したが、溝土は自然堆積の6層かある。掘り下げた所はGである。

いが見られる。ロクロ墨書き器は4~6層である。

点、きぬた状木製品、

トチと考えられる種子だ。

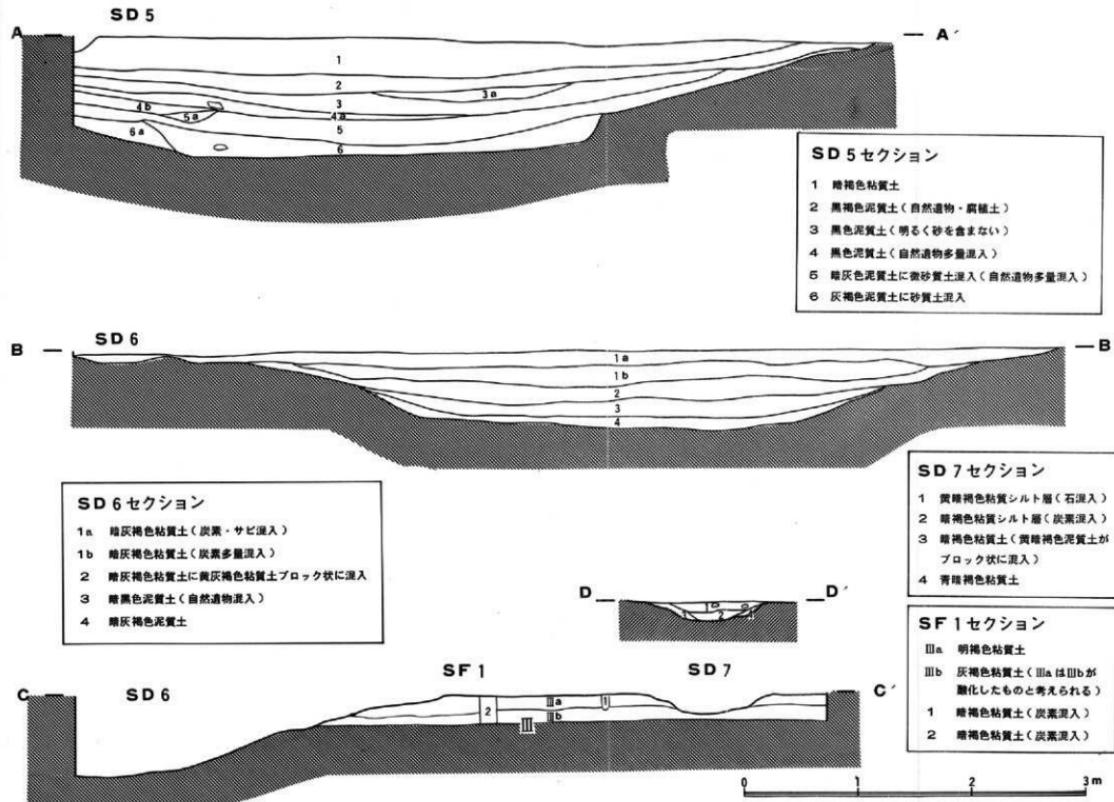
調査地西側でコーナー4cmを測る。覆土は4枚

須恵器・土師器の磨滅されず、4層では上面

て走ると考えられるが、なるため、コーナー部1層上面より5~10cmされた。

を確認したものである。~20cmで覆土は多量の

る。須恵器は135点検見られない。3層上面



第6図 溝跡土墨セクション

## d 土 墓 第6図 第3回版

S F 1 G 18~29-63 第III層上面, S D 2 と S D 3 の間で検出されたもので、底辺が 2 m を測り、地山を掘り込んで構築されている。コーナー部も明瞭に確認され S D 6 の製作年代は同じと考えられる。

S F 1 下端地山より唐津焼の小皿が出土している。<sup>註3</sup> 高台は片薄高台で、使用痕が著しい。

## IV 考 察

本年度の調査は、緊急発掘で検出された S B 1 ( 3 間 × 7 間 ) の東地区に同様な規模をもつ建物跡が存在するのか。S D 1 が東方に直進するのか。S D 2 はどのような性格をもつのか。という課題があげられる。

本調査では、東地区に建物跡が検出されず、S D 5 が検出された。S D 5 の断面は西上端が調査地外で検出されないが、ゆるい「 U 」字形をなして、6 層の覆土が確認される。最下層は砂疊層となり、出土する遺物、覆土等から S D 1 と結び付く溝と思われる。深さは地山より 1.1 ~ 1.2 m を測り、湧水が激しい。S D 5 の東側上端線をもとに S D 1 を結ぶと約 130~140 度の角度をもち北北西の方向に遺構が確認される。S D 5 の最下層は砂疊層で、ボーリング探査にて、認知するに砂疊は蛇行状にあると考えられ、遺跡西方にある眺山丘陵から流れる薬師沢の沢水が走っていたと想定されよう。

S D 2 は、農業用水路で切られ、G 32-42 の確認された遺構であり、S D 6 と同一溝であることが確認された。深さは上端より 70 cm を測り断面はゆるい「 U 」字状の溝で 4 枚の層からなる。「 L 」字状に検出されて、3・4 層は自然堆積層と考えられ、1・2 層からは磨滅の著しい土器片が出土することや、黄褐色粘質土がブロック状に入り込んでいることより、自為的に埋められたものと推定する。使用年代は正確に把握することができないが、第 4 層上面より出土した片口土器 ( R P 134 ) の珠洲系の土器より、最終使用年代は 14 世紀と考え、埋められた年代は S F 1 地山より唐津焼 ( 小皿 ) が出土していることより、16 世紀前半まで、と考えられる。このことは、16 世紀後半と考えられる、当地域の古地図 ( 平家文書 ) には建物及び掘り跡が確認できることからも頷ける。この溝の規模及び製作年代を把握することは今後の調査のうえで最重要であると考えられる。この S D 6 の外側を廻るように S D 7 が平行して検出されていることより、S F 1 が土塁であると思われる。製作年代が S D 6 と S D 7 が同時期であるのか。また、平行して遺跡を区画する溝であるのか。出土する遺物も少なく、今後の問題と云える。

掘立柱建物跡として検出された S B 9 は、北から西に 12 度の傾きをもち、掘り方は、開

九方形を呈している。SB 10は掘り方が円形で北から西に9度の傾きを示す。SB 2・4（緊急発掘調査検出）と、近い傾きを示すがSD 5・6により区画されていることから、時代的推定はつけがたい。SB 9とSB 10ではSB 10が新しいと考えられるが、切り合いがみられなく、埋土から遺物が検出されないことより、時期的推定は今後の課題とする。

以上、SD 1は、最初の予想では東方に伸るものと思われていたのだが東方に伸び、すぐ北向きに伸ることが確認され、この溝は遺跡全体の東南境域を区切るものでなく、複雑になった。今後、両大形溝跡を正しく把握することと、当遺跡より1～1.5km内に本遺跡と同じ遺物が検出される地域が広く確認されているので、それらの地域を含めた調査が必要と考えられる。  
註4

註1 川西町埋蔵文化財調査報告書第2集参照

註2 吉岡康暢氏鑑定（石川県立郷土資料館）

註3 水野哲氏鑑定

註4 招城前遺跡、開遺跡、片町東遺跡（第1図）

調査地遠景



発掘前風景



発掘風景



S B 9

建 物 跡



S B 10

建 物 跡



S B 9

掘 り 方



S D 5 • 6 • 7

溝 跡



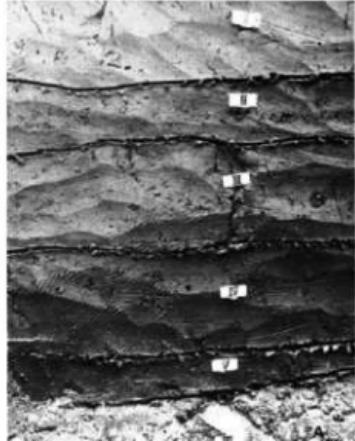
S D 5

遺物出土状況 (4)



A S D 5 層位

B S D 6 層位





R W172  
主



R W173  
田



R W174  
二方



R W178  
由



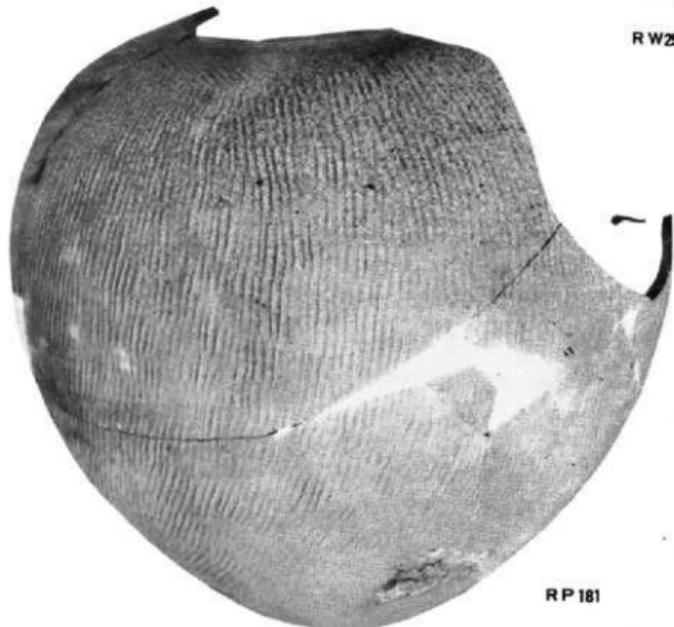
R W179  
水



R W180  
平

第4図版 S D 5出土遺物





第5回版 出土遺物



緑と愛と丘のある町

---

道伝遺跡第1次調査概報

昭和56年3月28日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行 川西町教育委員会社会教育課

印刷 上 ね ざ わ 印 刷

---